

第28回 兵庫県生物学会総会報告

期 日 1974年5月25日, 26日

会 場 神戸市立教育研究所

第1日

会長あいさつ 室井 綽 会長

- 表彰 渋谷 久雄氏 生物学会に貢献
内波 秀一氏 生物学会に貢献
当津 隆氏 生物学会に貢献

○森・三木・紅谷生物研究奨励金授与

- 高橋 寿郎氏 兵庫県下の昆虫の研究
- 松山 確郎氏 丹波地方の自然研究
- 山本 広一氏 兵庫県下の蝶類の研究

研究発表

- 高橋 寿郎氏 兵庫県の甲虫相
- 広内 督文氏 花粉管の屈曲的伸長
- 山本 広一氏 兵庫県下の蝶相
- 横山 章氏 lobed-oak の化石葉について
- 前田米太郎氏 洋ランの家庭栽培

議 事

1. 会務報告 当津 隆 理事長

2. 会計報告 平畑政幸氏 (裏表紙参照)

3. 行事計画について

夏期研修会

(A) 富士竹類植物園見学 8月10日~12日

(B) 富満高原自然観察 8月20日~22日

4. 次期総会場の決定確認

昭和50年度は阪神地区に決定再確認, 建武氏あいさつ。

5. 予算案審議 (平畑政幸氏)

年間会費を1人1,000円に増額承認

第2日

仏谷方面へ自然観察 講師 室井 綽 博士

講 演

日本の農耕文化

国立民族博物館設立準備室次長

佐々木 高明 先生

日本の農耕文化

ユーラシアの東部と西部とはちがう。西部では温帯と熱帯とが砂漠をはさんで接しており, 東部では熱帯多雨林の北に温帯雨林が接している。これがその後の人の歴史の文明のちがいにみられる。

このユーラシア東北部には暖温帯に照葉樹林が開け, カシ, シイ, ツバキを主体とする。ブータン東部は未調査だが, 北ヒマラヤ, 雲南, 揚子江の南にかけて照葉樹林があり, 景観的には日本とそっくりで, 日本文化の故郷として重要であり, この地帯におもしろい文化的まとまりがあると主張するのが中尾佐助である。

その特色というのはベースにあるものは根菜農耕文化である。このうち温帯に適したサトイモ, ナガイモがうけ入れられ, さらに西から雑穀文化が入り, そのうちムギ, コムギ, トウモロコシがとり入れられた。農耕は焼畑の形態で雑草の種子を殺し, 数年するとまた他の所を焼いて耕地にした。19世紀の雲南, 華南地方の古い生活 (漢民族と接していない) は刀耕火種で1年めは陸稲, トウモロコシ, 2年めはサツマイモ, 3年めはタロイ

国立民族博物館設立準備室次長

佐々木 高明

モ, その他アワ, シコクビエ, モロコシを作っている。台湾の高砂族もこの型である。

その他照葉樹林独特の作物は次のようである。

1. クズ, ワラビ, テンナンショウの地下部, シイ, カシ, トチの澱粉を水でさらし, 特殊な毒ぬきをしていることは南アジアから日本までである。
2. チャおよび類似の葉を加工して飲む。これははじめ薬用であった。
3. 穀類とカビのかたまりを利用してアルコールをつくり飲む。
4. 昆虫のまゆから糸をとり, 衣をつくる。カイコ, シンジュサン, ヤママユ, その他, 。
5. ウルシ, 近縁種の樹液から漆器をつくる。華南, 雲南, ビルマ, 日本にある。
6. 餅をもつ。イネ, アワ, キビ, モロコシ, ハトムギなどにモチ, ウルシ性の両方あり, モチ種の分布は見事にこの地帯に限られる。ここに住む人々の間にモチに対する文化的嗜好性があった。高砂族にも祭りのと

きにアワモチをつくる習慣がある。

モチ嗜好性についての仮説

照葉樹林に住んだ人たちのモチを嗜好した。モチはこの地帯の人々の儀礼食で、晴れの日にモチをついた。この意味で日本文化の典型は南照葉樹林帯につながるものである。この根源は根菜文化の中に発生したと考えられる。すなわち、元来、常時はタロイモ、ヤマイモをゴロで水炊きしていた。晴れの日にはウスとキネでつぶして団子にして丸めて食した。この習慣は太平洋域に今も残る。ヤマイモ、サトイモのネバがイネ類のモチを容易に選択してこれを温帯にもちこみ、儀礼食として、今日まで維持したのではないか。日本の文化は食物のみならず、精神文化の神話などもタイ、インド、ビルマ、ネパールと似たところがある。

次に焼畑中心の生活は水田の村とは別系統であるということである。焼畑には狩猟がついており、九州五本松の奥には今も正月の儀礼に集団でハンテングが行われている。日本の焼畑に陸稲がないことは水田が山にのぼったのではないことを示すといつてよい。縄文時代には平

野にも山にも焼畑があり、平野にはあとから水田が入り、焼畑は山に残った。山ではイモと雑穀をつくり、これが残った。縄文時代にモミが出てくるというが、必ずしも稲でなく、アワ、シコクビエ、ヒエ、アカザなどの可能性がある。コメよりもシコクビエはおいしい。

日本の文化は照葉樹林文化が主流であるがすべてではない、ナラ林文化とでもいうべき北方系農業がまじっている。東北中部の焼畑には満州、シベリアと共通するカブ、タカナ、ダイコン、ゴボウ、ネギがある。また、アワの品種とその栽培地の分布をみると3つの大系に区別できるのではないか。すなわち、北からまわって入ってきた北方系農業に入ってきた系統と、南の島から沖縄を経て来た系統と、照葉樹林の中を東へやってきた系統とにわけられるのではないかという仮説が考えられる。1つの分野だけで日本文化の系統を考えれば他の研究分野の結果と偶然の一致もあるかもしれないので、多方面からの究明をしていって多くの一致点を見出したところで結論されるべきもので、この点でこのアワの系統分布も1つの仮説として出したい。(文責・岡村)